

墨水秋夕（安積良齋）

霜 落ちて 滄江 秋水 清し

醉余 杖に 扶けられて 吟情を 寄す

黄芦 半ば 老いて 風に 力 無く

白雁 高く 飛んで 月に 声 有り

松下の 燈光 孤廟 静かに

煙中の 人語 一船 行く

雲山 未だ 遂げず 平生の 志

此の処 聊か 応に 我が 櫻を 濯うべし

霜落滄江秋水清 醉餘扶杖寄吟情
黄蘆半老風無力 白雁高飛月有聲
松下燈光孤廟靜 煙中人語一船行
雲山未遂平生志 此處聊應濯我櫻

解説 晩秋、江戸・隅田川の静かな夕景を眺めながら、自分の感懐を詠じたもの。

語釈 ※隅田川||武蔵と下総二国の境界、つまり二国の隅を流れるところからつけられた名称。 ※霜落||秋も深まって霜がおりること。 ※滄江||青い隅田川の流れ。
※醉余||酒に酔った後。 ※扶杖||杖をついて。 ※寄吟情||心ゆくまで詩歌を作る心。
※黄芦||枯れて黄色くなった芦。 ※風無力||微かに風のそよいでいるさま。
※白雁||雁に似ているがやや小さくて白い。 ※孤廟||ただ一つ離れて建つ神社の意。
おそらく白髪神社であろう。 ※未遂平生志||平生故山に帰臥したいものと思いつつも、その志のとげられないことを言ったもの。 ※此処||墨田川畔の堤。
※聊||いささか、かりそめ、しばらく、などの意。 ※濯我櫻||心を清めるの意。

通釈 秋が深まり、霜の降りる頃ともなれば、蒼く広々とした隅田川の流れは清く澄みわたる。酔後、杖に助けられて、川岸に来て诗情にひたる。すでに芦の葉は半ば枯れて黄色くなり、吹く風にもなんとなく力が無い。白雁は天高く飛んでおり、その声は、月の中から聞こえてくるようである。ぽつんと建てられた松林の中の祠には燈火が見え、夕靄の中には人語だけを残して、一艘の船が過ぎて行く。平生は雲山の彼方、故郷に帰臥して自然を友として悠々自適の暮らしをしようと願っても、それが出来ないのので、せめて、この清流で冠のひもを洗い、心を清めることにしよう。